

氏 名	HAN HAOWEN (カン コウブン)
学 位 の 種 類	博士 (造形)
学 位 記 番 号	博第 54 号
学 位 授 与 日	2025 年 9 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 3 条第 1 項第 3 号該当
論 文 題 目	芸術の境界を搖るがす偽物 —その意義と展望
審 査 委 員	主査 武蔵野美術大学 教授 複田 京太朗 副査 武蔵野美術大学 教授 小林 耕平 副査 武蔵野美術大学 教授 春原 史寛 副査 武蔵野美術大学 教授 富井 大裕 副査 東京国立近代美術館 主任研究員 成相 肇

### 内 容 の 要 旨

本論文は、「偽物」という概念を核心に据え、西洋と東洋の芸術思想史を横断的に再検討し、ポストモダン以降に発展したシミュレーションズム (Simulationism) 理論およびスラヴォイ・ジジェクの「現実界」概念を導入しつつ、芸術における偽物の多面的な意味と創造的可能性を、理論と実践の両面から明らかにする。最終的に、「偽物」を文化における「有標項 (一般性が低く、特殊な方)」の再発見として機能させる創作手法が、現代芸術において有する意義を論証する。研究方法として、文献研究・作品分析・自身の制作実践の往還を採用した。

序章では、「偽物」が単なる物質的模倣を超えて、真正性、オリジナリティ、現実と虚構など多様な問題系に深く関わることを指摘し、筆者が幼少期の中国社会における多様な「偽物」体験を通して本研究への関心を形成した経緯を述べる。

第1章では、西洋と東洋における「真偽」と「模倣」をめぐる思想的展開を整理する。西洋ではプラトンの芸術観からルネサンス以降の芸術の自律性追求に至る過程を論じ、東洋では道家・儒家思想に見られる真偽観の相対性や、模写・集団創作の肯定的受容を明らかにする。さらに筆者の来日前の作品分析を通じ、芸術における真偽概念の多様性と流動性を提示する。

第2章では、近代以降の複製技術と資本主義の発展が「一回性」という芸術の前提を搖るがした過程を検討する。ヴァルター・ベンヤミンの「アウラ消失」論を起点に、複製が芸術の境界を侵食しつつ新たな創造可能性を開いた事例を分析する。また、アーサー・C・ダントーやロザリンド・E・クラウスらによる「歴史・文脈主義」を通じ、一度は排除された「偽物」が再び芸術制度に取り込まれる経緯と、東洋の伝統的芸術の再評価について

も論及する。

第3章では、ポストモダン以降のシミュレーションズムに着目し、既存の芸術記号を再構築することによって新たな意味が生成される仕組みを分析する。マイク・ビドロや日本のシミュレーションズム事例を通じ、「オリジナル／コピー」という二元的区分の超克と、新たな批評的価値の創出を論証する。また、「関係性の芸術」における制度批評の側面を検討し、美術館制度や芸術市場の構造を疑似的に再構成する実践の意義を明らかにする。筆者の《模写蘭亭序》《都市登山計画》を事例に、伝統的符号の操作・再構築を通じた批評的かつ創造的な「偽物」の力を具体化する。

第4章では、ジジェクの「現実界」概念を導入し、「偽物」が逆説的に「本物」以上に現実を鮮明化する可能性を考察する。オラファー・エリアソンやフランシス・アリスの作品分析を通じ、矛盾やナンセンスが鑑賞者の認識を揺さぶり、現実の再発見を促す契機となることを論じる。さらに筆者の《都市に沈没する》《月は光》《永遠の待つ》を分析し、「偽物」を媒介として既存の現実認識を超える新たな現実を提示する試みを明確化する。

終章では、芸術における「偽物」が単なる「本物」の対立概念ではなく、自己革新と意味生成の核心的手法として機能していることを総括する。同時に、「偽物」は文化において抑圧されてきた「有標項」への持続的注視と再発見を通じて、将来の芸術および社会の発展と変容に示唆と可能性をもたらすことを明らかにする。本研究は、東西の伝統的思想、現代のシミュラークル論、関係性の芸術、さらに哲学的考察を統合し、「偽物」の多義的特質を体系的に論じることで、現代美術研究に新たな視座を提示するものである。また、理論研究と制作実践の相互往還を通じ、総合的な芸術論としての学術的価値と意義を示す。

## 審査結果の要旨

美術・芸術のさまざまな「真正性」が語られる中で、カン・コウブンの「偽物」をめぐる考察は、一見奇異なものに思われるかも知れない。しかしこの論文にも登場するマルセル・デュシャンやアンディ・ウォーホルが美術の教科書的存在となった現代においては、美術・芸術を語る上で「偽物」をどう捉えるかということは、むしろ正当な美術・芸術論の条件と言えるのではないか。この時代に「偽物」を論じるその正当性に、この論文の意義と困難さがある。

まず論文の導入として、筆者の母国である中国で幼少の頃から身のまわりにあったコピー商品や模造品の存在、また臨書や模写による学習の経験が語られる。それらが「偽物」に連なるものだったことを知った時の筆者の驚きや価値観の転倒は、この論文の起点に重要なアリティを与えている。

第1章では東洋と西洋の真偽に対する認識の相異が論じられる。まず西洋においてプラトンの芸術観における「模倣」というキーワードをめぐる論が展開され、そこからさまざまな歴史的な背景を経て、西洋の芸術が自律的な「本物」としての意義を獲得してきたこ

とを論じた。それに対して、東アジア、特に古代中国では「真偽に対して絶対的な判断を下すことではない」とし、「模倣」という概念がむしろ革新的に芸術を推し進めたという観点から、西洋と東洋の興味深い対比が鮮やかに示される。

第2章ではヴァルター・ベンヤミンの高名なテキスト「複製技術時代の芸術作品」で論じられた芸術作品のアウラの消失の議論を起点に展開される。アンディ・ウォーホルとマルセル・デュシャンによる現代美術の記念碑的な作品をあらためて取り上げ、日常と芸術の境界を侵食する非芸術の概念的な問題を論じた。またアーサー・C・ダントーの「芸術終焉論」を取り上げ、芸術を日常レベルからあらためて問い直す新しい「偽物」の在り方について論じた。また東アジア美術の近代以降の展開として、日本画、中国画における異種混合的な成立に「作られた伝統」を指摘しながら、ジャポニズム、オリエンタリズムと関連付けて論じている。

第3章では筆者の幼少期に中国で人気を博した「中国版ファミコン 小霸王学習機」を、筆者の身近に存在した「偽物」として紹介し、ボードリヤールの「シミュレーションとシミュラークル」の議論を通して「偽物と本物」の複雑な在り方を論じた。また80年代のアメリカでシミュレーションズムが興盛を誇った時代に、さまざまな議論の的になったマイク・ビドロを取り上げている。この露骨な「模倣作家」の評価は今も分かれるところだが、筆者は「アートワールドの空虚さを象徴する作家」としてその凡庸さを積極的に論じている。また同時期の80~90年代に、日本の村上隆らによるユニット「小・村・中」、中国の「廈門ダダ」によるあからさまなパロイディ作品を取り上げ、それらが「オリジナルと複製の境界の消失」させ、「オリジナリティや進歩性から解放した」と評価している。さらにニコラ・ブリオの「関係性の美学」にも触れ、リクリット・ティラヴァニアの作品を例に挙げながら、「偽物」という概念はもはや虚偽を意味するものではなく、新しい本物を創造するものになる」という大胆な仮説を提示している。その関連から、筆者自身の作品である古代中国の伝説的な書家王羲之の代表作を模写した「模写蘭亭序」と、コロナ禍の中国で偽物の登山をモチーフにした映像インсталレーション「都市登山計画」という興味深い2点について、その関連性を丁寧に論じている。

第4章では哲学者のスラヴォイ・ジジェクにおける「虚構と現実」の複雑な関係性の考察から、芸術における虚構／偽物の意義をさらに深く論じている。ここでのジジェクへの解釈は果敢で、現在の社会状況と接続させる視点において有意義である。それらの考察に続き、大掛かりなインスタレーションによって仮想現実を作り出す現代作家のオラファー・エリアソンを取り上げ、ジジェクの理論を起点に筆者自身の捉える芸術作品における自然と人工の新たな関係性について論じている。また「虚構と現実」に関わるもう1人の現代作家としてフランシス・アリスを取り上げ、一見無意味でナンセンスな行為によって生じる捏造された「神話」の意義について、再びジジェクの理論を援用しながら論じている。また「虚構と現実」、「人口と自然」についての関連から、今回の公聴会でも展示された筆者による作品、「月は光」「都市に埋没する」について解説し、より具体的な「虚構／偽物」

の芸術表現における可能性について論じている。

終章ではこれまでの議論を踏まえつつ、文化における「有標項」と「無標項」の理論を用いて、美術・芸術における「偽物」の在り方を結論づけた。

#### <作品展示について>

作品展示では「月は光」「都市に埋没する」の近作2点に加え、新作の「To Reach The Gate , Cross The Bridge」を展示了。それぞれの作品は、我々の日常にあるものを「偽物」として再現的に造形し、ナンセンスとも言える突飛な物語と接続させながら、奇妙な違和感を体感させる。展示室中央に設置された「To Reach The Gate , Cross The Bridge」は、橋と扉と池というシンプルなモチーフを大胆に組み合わせた舞台装置のような造形である。これは筆者の地元の中国の工場に発注し、それを展示場所まで輸送したもので、その制作プロセスによるハリボテ的な造形と、詩的な物語を感じさせるイメージとのギャップが興味深い。またセンサーライトを内蔵したマジックミラーの表層的な奥行き、それによる「永遠」のイメージと、自身の鏡像との対比も、哲学的な問いに見せかけた虚構性として「偽物」をめぐる筆者の思考の広がりと軽やかさを感じさせた。

#### <審査について>

まず本研究全体の基本的なスタンスにおいて、美術批評から哲学にいたる幅広い文献を読み込み、広く「芸術における偽物」について論じており、実制作者の論文が陥りがちな自己中心の世界観ではない、客観的な視点に立って論じようとする筆者の真摯な姿勢が印象的であった。一方で、研究者なら誰もが知るような美術、哲学における基礎的な研究・評論を広く取り上げたことで、一部でやや論点がぼやけ平板な議論に陥る場面も見られた。しかしこの論文の最も評価できる点は、東アジアの長い歴史における模倣や複製にまつわる独自な文化・思想を示しながら、それを西洋と東洋、あるいは真・偽という単純な二元論ではない視点から論じた点にある。また筆者の出自である中国文化が各所で参照される点も独自研究として特筆したい。それらの多義的な価値を積極的に導き出したところに本研究の学術的な価値がある。

同様に展示作品においても、「偽物」の在り方を緩やかに拡張させる独自なアイデアや詩的なアイロニーがあり、実制作者ならではのひらめきによって論文と作品が有機的に補完し合っていたと言える。

以上のような内容の審議の結果、審査委員全員一致で、博士論文として可とする結論に達した。

〈目次〉

序章

第1章 世界と芸術における真偽の展開——本物と偽物に分かれた世界

第1節 芸術と流動する真偽

概念的な存在

筆者と偽物の出会い

第2節 偽物と見なされた芸術

再現の道具

「影」に対する執着

第3節 自律性を持つ芸術

原作へのこだわり

真理への道

第4節 東洋芸術における模倣論

模写と集団創作

モノからの創造

第2章 西洋の文脈を中心とした現代芸術の境界問題

第1節 「一回性」に関する歴史的な危機

機械複製が可能な時代

本物の偽物

第2節 芸術と非芸術の間

歴史・文脈主義

芸術の終焉の始まり

第3節 東アジアと非東アジアの境界

「他者」によって生み出されるアデンティー

第三の空間

第3章 現代芸術における偽物の登場と展開

第1節 二つの新たな偽物

新たな偽物の出現

シミュラークルとシミュレーション

第2節 「シミュラークル」の偽物

アメリカで興ったシミュレーションズム

アジアの動向

第3節 システムの模擬—関係性の芸術

社会への注目

芸術における現実の再構築

第4節 自作における「シミュラークル」と「シミュレーション」

《模写蘭亭序》

《都市登山計画》

第4章 偽物の超越性の提案

第1節 空洞な現実界へージェクの視点から

虚構—幻影—現実

芸術の異化効果

第2節 本物より「現実界」に近い偽物

オラファー・エリアソン—人工的な自然

フランシス・アリスの作品における「偽物」の特徴

第3節 中間発表作品の説明

《都市に沈没する》

《月は光》

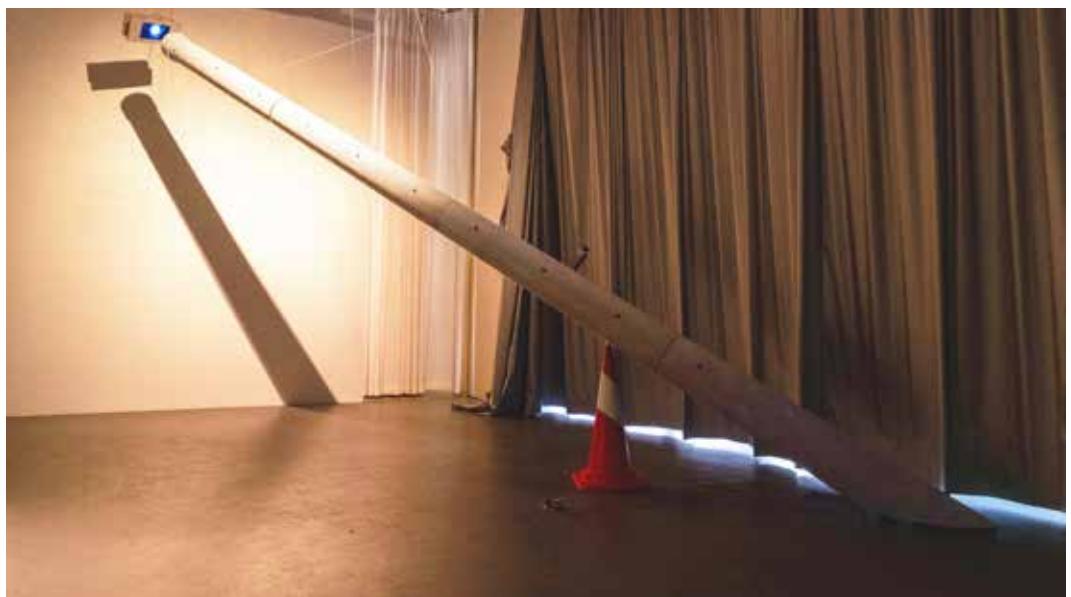
《永遠の待つ》

終章 結論

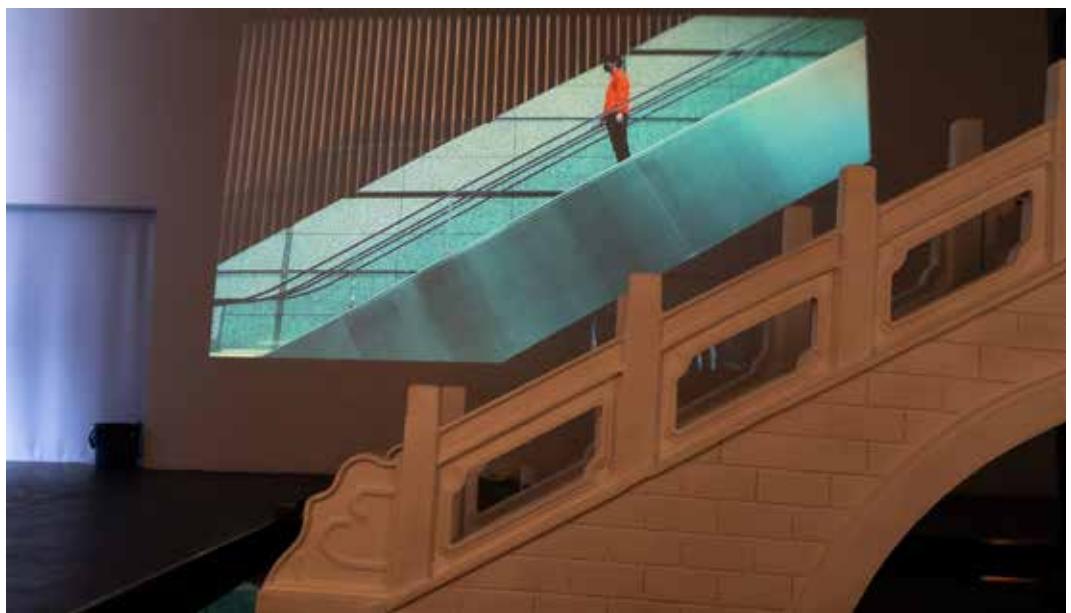
終わりに



《To Reach The Gate , Cross The Bridge》2025 年 H220×W240×D375cm 発泡スチロール、FRP、マジックミラー、他



《月は光》2023 年 H275×W45×D450cm PLA 樹脂、モニター、他



《都市に沈没する》2023年 映像、約10分



《都市に沈没する》2023年 H50×W35×D20cm 光造形樹脂